

Title	フォードの勞賃論
Author(s)	星野, 周一郎
Citation	經濟論叢 (1927), 25(2): 282-288
Issue Date	1927-08-01
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/128565">http://dx.doi.org/10.14989/128565</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號 二 第

卷五十二第

行發日一月八年二和昭

## 論 叢

營業税の課税標準

法學博士 神戸 正雄

文化現象の凝集作用

法學士 恒藤 恭

意味現實態

文學博士 米田庄太郎

國家の組織

法學士 作田 莊一

近世の港

文學博士 三浦 周行

## 說 苑

リカ  
アド 勞賃論とサス人口原則

經濟學士 森 耕二郎

植民及び植民地の意義

經濟學士 長田 三郎

## 雜 錄

フォードの勞賃論

經濟學士 星野周一郎

一九二六年度の英國銀行界

經濟學士 道上 清治

國際經濟會議

法學士 沙見 三郎

## 雜 錄

### フォードの勞賃論

星野周一郎

「これが此種の經營法の特徴で、之を彼は Wage Motive と呼んで居る。」

フォードによれば此二つの經營方法は社會の物質的生産力の發達の程度に應じて夫々適用を異にするべきものであり、即ち前の方法は主として需要の範圍の限られた小規模の手工業の生産に、又後の方法は無限の世界市場を持つ大規模の近世的工場生産に適應する。そして彼はかゝる立場から、所謂資本主義の行詰は、今日の實業家が、近世の大規模生産組織に對して今尙手工業時代の利己的經營方法を適用して居る結果であり、其間に在つてひとり北米合衆國が未曾有の經濟的繁榮に恵まれ、所謂新産業革命の時代を現出しつゝあるのは、大體に於て此國の實業家が、新しい生産組織に應じて新しい經營法を適用することを忘れた爲であると説明して居る。

のであるから要するに、一旦生産組織が新らくなれば經營方法も新らくなるべきであり、而して新らしい經營法の下には當然今迄とは異

く「My Life and Work」(一九二二)及「Today and Tomorrow」(一九二六)の二書を通じて窺ふことが出来る。彼はその中に business には二つの經營法が存すると云つて居る。一つは彼が Profit Motive と叫ぶ方法で、business は businessmen の金儲のために存在するとの見地から「安く買つて高く賣る」ことを其特徴とするもの、今一つは逆に消費者の方から出發し、business の繁榮が社會の購買力に依存すると見て、其源泉である勞賃收入の充實を計るものであり、従つて先のは反對に「高く買つて安く賣

1) 米國の自動車王、彼がその新らしい經營法により最近二十年間に集めた富は十二億弗に上ると云はれる。

2) Henry Ford, Today and Tomorrow 1926 p. 8

つた新しい勞賃制度が行はれなければならぬと云ふのがフォードの意見である。彼は云ふ「古い勞賃説では雇傭契約に於ける傭主と勞働者との力の強弱が勞賃の率を定めると説く。此説の下に勞働組合が起り、組織的闘争がボイコットやロックアウトを武器として開始された。しかしかゝる勞賃説は、嘗て金儲主義を生んだ掠奪本能の現はれに過ぎぬ。勞賃を定めるものは傭主の經營と勞働者の勤勉である。されば新しい勞賃理論の基礎附けは經濟學者よりも寧ろ實業家の義務であらねばならぬ」。

## 二

偕、斯様な抱負の下に主張されるフォードの勞賃説とは如何なるものであるか、今前記の書中に散在する斷片を綜合して其大要を窺ふこととする。

### (一) 流通行程より觀たる勞働及勞賃

フォードの勞賃説の特色を最も鮮明に言ひ表はして居るのは「一會社の従業員は其會社の最善の顧客であらねばならぬ」と云ふ彼の言葉で

ある。彼によれば、今日勞働階級は國民の大多數を占める購買者であり、勞賃は一國購買力の重要な源泉である。故に「失業者は仕事を失つた顧客である、彼は買ふことが出来ぬ。薄給の人は購買力の乏しい顧客である、彼も買ふことが出来ない。購買力の減少はやがて不景氣を生ずる。不景氣の救済は故に購買力を通じてなされるべく、その購買力の源泉は勞賃である」この理由から彼は、勞賃の引下が購買力の減少を來して景氣回復の方策となり得ぬことを明らかにし、聰明なる實業家は寧ろ絶えず勞賃の引上に努力して購買力の充實を計り、勞働者を最善の顧客となすことに於て事業繁榮への道を見出すであらうと述べて居る。

フォードによれば、勞働者は右の如く business 外に於て經營者の最善の顧客であるが、又 business 内では經營者の partner であるとせられる。即ち兩者は一體であつて、勞働者は腕による經營者、經營者は頭腦による勞働者である。従つて勞賃は partner distribution 即ち business

3) Ford, *ibid.*, pp. 151-152

4) Ford, *ibid.*, p. 151.

の兄込利益の先拂ひであり、其大いさは *highly* の大いさ——傭主の經營と勞働者の勤勉——によつて定まる。

以上を通じて絶えず力強く現はれて居るのは「勞働は商品にあらず」この思想である。即ちフォードは、勞働者を勞働の賣手としてのみに注意した實業家の *tradition* を破ると共に、勞賃を商品の代價と見て其が他の商品に於けるが如く再生産の *cost* 即ち生活費に於て定まると説く説を顛倒し、かゝる説は進歩の停止せる經濟社會に於ての外は無意味であり、勞賃は生活費によつて定まるのではなく、反對に勞賃が生活費を定めるのであると説いて、勞働者を商品の地位から解放せんとした。換言すれば、勞賃は無限に高くすべきものであつて、又無限に高くなり得るものであることを示したのである。

では高い勞賃は如何にして可能であるか。曰く「其は工場の中から生れる」

(二) 生産行程より觀たる勞働及勞賃  
先に勞働を商品と見ることに反對したフォードは、

ドは、こゝに於て一轉して勞働と商品との類似性を指摘し次の様に述べて居る。

「勞働の購買は他の物の購買と少しも異らない、即ち支拂つた代價に相當する丈のものは得なければならぬ。だから高い勞賃と云つても、其は過去に比べてより高い勞賃であつて、正當以上の勞賃支拂を云ふのではない。其は勞働者が自己の働きによつて取るより外はない。一國は勞働によつて維持される、日々の生産的勞働はこれまでに與へられた中で最も貴重な富の源泉である。故に若し高い勞賃に對して少しの勞働がなされるときには、其は徒らに生産費を高め、物價の騰貴を來すことゝなつて購買力の増加は望まれない。要するに高い勞賃は、唯其が要求されたと云ふて支拂はれるものでないことは勿論、其が社會の購買力を増すことにならねば、換言すれば其が生産費の低下を伴ふのでなければ拂ひ得ないのである」

此點より見てフォードの所謂勞賃引上は、その半面に於て單に引上げられた勞賃率に相等す

る生産能率に止まらず、更に其以上の能率引上を豫期するものと云はねばならぬ。簡單な例によつて此點を説明すると、例へばフォードの工場に於て、八時間労働で四弗の勞賃を得る一労働者が一日自動車一臺を製造し得るものとし、便宜上假に此場合勞賃以外に生産費を要せぬものとすれば、一臺の生産費は四弗である。今勞賃を四弗から六弗に五〇%だけ引上げることによつて、生産力も同じく五〇%を増すとすれば生産費は依然一臺當り四弗を下り得ないが、若し生産力が五〇%以上例へば二〇〇%増して、自動車の製造能力が一日一臺から三臺に引上げられるときには、生産費は一臺當り四弗から二弗に下ることとなるから、かゝる見込の附いた上で始めて勞賃引上は可能となる、と云ふのがフォードの説である。

フォード工場の勞賃引上は、斯様に生産力のより大なる引上を前提とするものであるが、しかし其を以て「人間労働力の搾取はフォードに於て其最高段階に達する」と云ふことは更に考

察を要する。成程先の一日一臺の場合には、四弗の勞賃を拂つて八弗に賣れば（八弗は無論假定であるが將來之を實現するのがフォードの理想である）残りの四弗が經營者の利潤になり、後の場合には、三臺二十四弗に相當する自動車を製造して、内六弗を労働者が、餘の十八弗を經營者が取る計算になるから、社會主義的な表現方法を以てすれば、労働者が資本家のための無料労働に使役せられる時間は、先の四弗の勞賃の場合には一日八時間の二分の一であるが、後の六弗の場合には其四分の三に達する、と云へぬでもない。けれども其は唯紙上の計算がそうなると云ふに止まり、現實の經濟界では生産費の低下は結局販賣價格の引下となるのが常である。殊にフォードの所謂 Wage Motive による經營法では、かゝる場合即座に價格を八弗から四弗位に引下げて賣上數の増加を計る故、そうすれば三臺の賣上價格十二弗は折半されて労働者經營者何れも六弗を得ることとなり、所謂剩餘價值率は元のまゝである。尙此計算による

と生産費の引下によつて勞賃及利潤が各々二弗を増したに對し、自働車の購買者は價格の半減によつて十二弗の負擔を輕減される。「生産費引下による利益は社會に屬する、經營者勞働者は價格引下がもたらす取引量の増加によつて酬いられやう」これフォードが business を以て self-vice とする所以である。

そこで次に問題となるのは、斯様な生産力の引上は勞働者の身心に如何なる影響を及ぼすか、高い勞賃と低い生産費との間には如何なるからくりが潜んで居るかと云ふことで、之が所謂 Fordism の問題である。

今此點に關するフォードの意見を極めて簡単に云へばこうである。曰く、高給を支拂はれる勞働者は、生活の不安を持たずに且自己が僱主の partner であることを意識して仕事に熱中することが出来るから、勞賃の引上は既に其自身に於て生産力増加生産費引下の效果を持つ、が就中此目的を達するために最も重要なものは生産方法の不斷の改善であつて、此等は生産費を減

すると共に又殆んど例外なしに勞働の苦痛を和らげ、hard work を work hard に、即ち長時間の苦しい生産力の乏しい勞働を、短時間の愉快な生産力の豊かな勞働に轉化する。此等の改善は主として分業、機械の應用、標準化、原料の節約等によつて行はれるが、要するに人間勞働の浪費を避け、出来る丈之を有効に使用せんが爲に外ならない。

そして此等の改善が、極めて徹底的に而も一刻の休もなく續けられて行く點にフォード事業の生命が存するのであつて、之に關する多くの實例は彼の「Today and Tomorrow」が興味深く物語つて居る。彼はある批評家の云つたやうに「生産品に就ては保守的」と云ひたい程慎重であるが、生産方法に關しては極めて大膽で且革命的である。一切の tradition を排斥するフォードの工場が持つ唯一の tradition は「あらゆるものは改善の餘地を持つ」と云ふことである。

かくてフォードは生産費の引下が無限に可能であることを疑はない。そして之が勞賃の引上

7) Ford, *ibid.*, p. 235.

8) Walcher, a. a. O. S. 23.

と相伴ふて續けられるに於ては、購買力は無限に増大してやがて貧乏は征服されるであらうと云ふのである。

### 三

フォードの勞賃説に於ける注目すべき特色は彼が資本主義の行詰を生産力の増大に應じて消費力の増大が計られなかつた結果と見ることから、商品の賣手としての勞働者の外に、商品の買手としての勞働者を發見したことである。彼が勞賃を購買力の源泉と見たことは、過去の勞賃説を轉回して之に一新生面を開き、新しい勞賃説建設の基礎を提供したものと云はれやう。

即ち勞働者を勞働の賣手とのみ見た實業家は生産費低下のために先づ勞賃引下を行つた結果自己の製品の國內市場を見出し得ないため、國外市場に販路を見出さんとし、此販路獲得競争は遂に戦争の原因ともなるに至つた。即ち戦争をするのは貧乏の結果であつて、戦争の結果貧乏となるのではない、とフォードは云つて居る。彼は又云ふ、「今日の貿易は謬想で満ちて居る。

貿易は必ずしも國を富ますものではなく、寧ろ多くの場合輸出の必要が高調されることは其國民の購買力が、不當に低い勞賃のために如何に搾取されて居るかを物語るもので、かゝる貿易は貧富の懸隔と國際間の不和とを増すのみである、何故に先づ内を省みて國內の購買力を充實しないのであるか。一方先進國のみが造り得た商品は今や後進國に於ても出来るやうになり、此意味に於ても先進國の輸出は次第に困難となりつゝあるから國內市場の開拓は益々緊要である。かくの如く各國が先づ自分の國內の購買力の充實に着眼するに至れば、後進國の産業進歩と相俟つて各國の經濟生活は次第に自給自足を原則として、貿易は唯國々の獨占的特產品に就てのみ行はるゝこととなり、今日の誤つた基礎に立つ貿易は消滅して、將來の貿易は再び其本來の面目たる有無相通するの奉仕的機能を復活することゝなるであらう」<sup>9)</sup>

フォードは斯様に Wage Motive が、ひとり社會問題の解決に貢獻するのみならず、更に國



際間の平和をもたらすものであると説いて居る、が果して Wage Motive はあらゆる國、あらゆる産業部門を通じて遍く行ひ得るやは問題であり、此等の問題に就ては又別の機會に考察したいと思ふ。(二・七・五)